

36 放射線科医がCT・MRIの読影レポート作成を翌営業日までに終えた割合

国立大学
病院

指標の意義

高度な医療を提供するためには、画像診断をより早く、より正確に行う必要となります。放射線専門医によるCT・MRI検査の画像診断レポートが翌診療日までに作成された割合を表現する指標です。算式は画像診断管理加算2の算定要件（80%以上）とする。

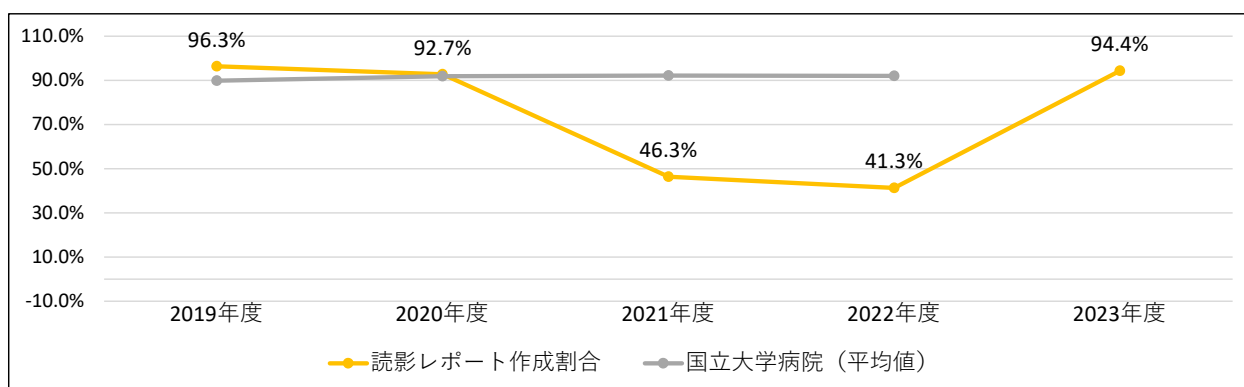
定義

分子 常勤・放射線専門医が検査翌診療日までに読影レポートを作成したCT・MRI検査読影件数×100

分母 CT・MRI検査数（ただし、検診は除く）

当院の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
翌診療日までの読影レポート数	45,790	43,248	21,992	19,996	45,718	(件)
対象レポート数	47,539	46,642	47,502	48,464	48,444	(件)
読影レポート作成割合	96.3%	92.7%	46.3%	41.3%	94.4%	(%)
国立大学病院（平均値）	89.9%	91.8%	92.1%	92.0%		



指標の説明

2021,2022年度の実績データに比べ、読影医が1名増えたため、2023年度は読影レポート数が増加し管理加算2の取得が可能となりました。

37 放射線科医が核医学検査の読影レポート作成を翌営業日までに終えた割合

国立大学
病院

指標の意義

指標No.35と同様に、核医学・PET-CT検査における適切な画像診断がなされていることを表す指標です。常勤・放射線専門医による核医学・PET-CT検査の画像診断レポートが翌診療日までに作成された割合を表現する指標です。

* 算式は画像診断管理加算2の算定要件（80％以上）とする。

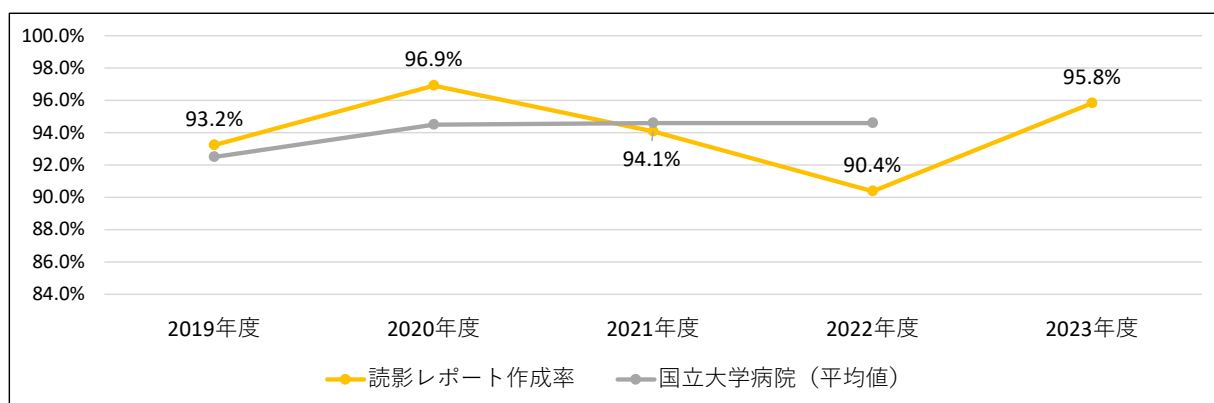
定義

分子 常勤・放射線専門医が検査翌診療日までに読影レポートを作成した核医学・PET-CT検査読影件数×100

分母 核医学・PET-CT検査数（ただし、検診は除く）

当院の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
翌診療日までの読影レポート数	4,751	4,643	4,579	4,422	4,681	(件)
対象レポート数	5,096	4,791	4,867	4,893	4,885	(件)
読影レポート作成率	93.2%	96.9%	94.1%	90.4%	95.8%	(%)
国立大学病院（平均値）	92.5%	94.5%	94.6%	94.6%		



指標の説明

前年度同様に読影率90％以上を維持しており、読影医の1名の増えたことにより5％の読影率が増加しました。

38

読影レポート既読率

自院

指標の意義

画像診断を依頼した医師の画像診断報告書の確認不足が患者の治療に影響した事例が散見されている。依頼医が、対象レポートを確認したかを示す指標です。既読管理対象レポートは放射線専門医が読影したCT・MRI・PET-CT検査レポートとする。

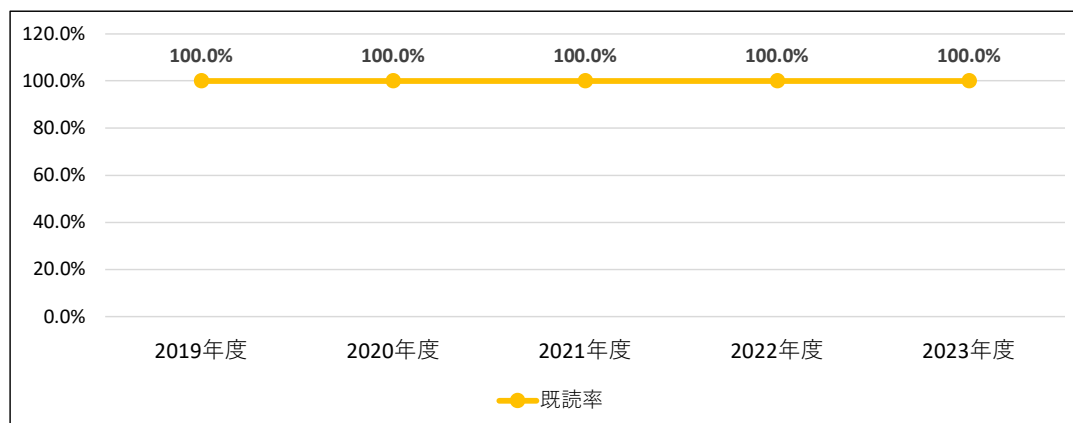
定義

分子 依頼医が読影レポートを確認した数×100

分母 既読管理対象レポート数

当院の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
依頼医によるレポート確認数	53,038	52,393	53,547	52,502	53,329	(件)
既読管理対象レポート数	53,038	52,393	53,547	52,502	53,329	(件)
既読率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	(%)



指標の説明

今年度より管理及び未読者への報告行為が、部門システムから電子カルテシステムへ移行した。大部分の管理業務が迅速で漏れの無い自動通達となったため、今年度も100%を達成できると考えられる。また、退職者や長期休業者の既読について、各診療科部長の代行既読が可能となったため、より確実な読影レポート既読管理が実施できています。

39

病理組織診断件数

自院

指標の意義

がんの正確な診断は病理診断により行われ、これに基づき的確な治療が選択されます。組織診断件数はがんの診療において、正確な診断が行われたことを示す指標となります。

定義

病理組織診断件数 = 生検検体数 + 術中迅速検体数 + 手術検体数

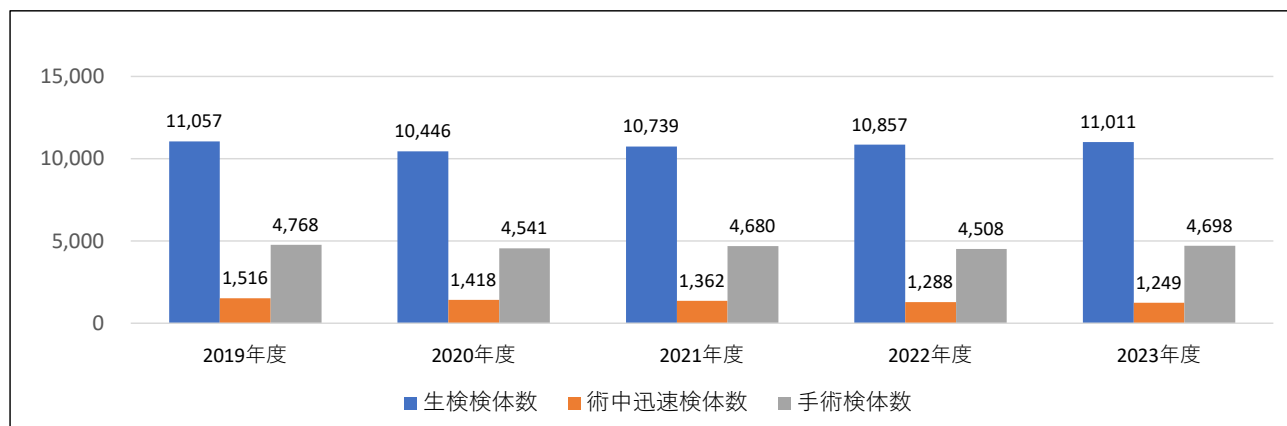
※生検診断は、組織の一部を採取して良性・悪性の判定や治療の選択をする（生検検体）

※術中迅速診断は、手術中ががんの広がりや転移の有無を診断する（術中迅速検体）

※手術検体の病理組織検査は、術後の治療選択のためにがんの悪性度や進行度を詳しく調べる

当院の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	(単位：件)
生検検体数	11,057	10,446	10,739	10,857	11,011	
術中迅速検体数	1,516	1,418	1,362	1,288	1,249	
手術検体数	4,768	4,541	4,680	4,508	4,698	
病理組織診断件数	17,341	16,405	16,781	16,653	16,958	



指標の説明

2023年度の病理検査数は過去4年間でほぼ同じで、内訳も大きな変動はありません。検査総数は国内のがん専門病院の中でもトップクラスにあり、病理診断を含めた精度の高い診断のもとに適切な治療が行われていることを示しています。組織検体は細胞や組織の形態診断だけでなく、遺伝子変異やタンパク質を見る分子診断にも使われるようになり、分子標的治療薬の選択にも多く用いられてきています。